

『紅花慕情』

佐藤洋詩恵

春浅き日、平松緑様から、「紅花に関する論文、いえ、何でもいいのよ。お書きくださらない？」とのお電話をいただいた。「論文」と聞いて、とつさに身構えた私の気配を瞬時に察し、すぐに「何でもいいのよ」とおっしゃる優しさに力不足も考えず、なつかしく私のことをお心にとめていただいていたことの更に嬉しく、お引き受けした。嫁して二十六年、日々、宿の場で忙しくしている我が身を振り返れば、久しく原稿用紙に向かうこともなく、学生時代に戻ったような気持ちで、『紅花』に思いを巡らせてみる。

『紅花』を初めて見たのはいつだったのだろうか？

『山形弁を話せない女将なんて興ざめだ。山形らしいおもてなしを期待して伺ったのに、裏切られた気持ちです。素朴な従業員の皆様に比して、あなたはふさわしくないと思えます。奥にひっこまれた方が賢明だと思えますが：』昭和五十七年の銀座出店を機に、義母が上京し、留守を預かる形で、私が二代目として、前面に出るようになった頃、

届いた差し出し人不明の手紙。自らの意志を貫いた主人との縁により、私に与えられた女将という生業の深さ、『たかが一夜の宿の女将、されど一夜の宿の女将』の想い一念、この一通の手紙が、後年、私の宝物となったのである。嫁いで翌年の八月そして次年の七月に、長男、長女と年子で出産した私が、東北四大祭りの一つ、山形の花笠祭を見たのは嫁いで三年目の夏であった。紅花の紅餅をイメージして作られたという花笠の美しい波のうねりを旅人の如く、眺めながら、夏の夜空を仰ぎ、『柳は緑、花は紅』とつぶやきながらも、山口生まれの広島育ちの私は、異郷の地で二児の母となり、家業である宿の切り盛りが、近い将来、私の肩にかかってくるという現実気付いたのである。「毎日、蔵王でスキーができるよ」と言った主人の顔が浮かび、思わず「嘘つき」と心の中で叫びながら、「勝って嬉しい花いちもんめ。負けてくやしい花いちもんめ」と口ずさんだ唱に出てくる花とは紅花の花だったのかなどと、私の内

なる紅花幻想は次々と拡がってゆき、長男を背負い、長女を両手にかかえ、私はケラケラと大声を立てて笑っていた。家業に忙しい義母を助けて、主人と義姉を育ててくれた者が、幸いにして、ふたりの子供達の世話を親身にしてくれたので、子育てを優先させながらも、宿に出るようになっては私は、義母と片時も離れず行動を共にした。私にとつては女将という職が興味深く、山形の地に慣れない私のことを案じながらも外の仕事が多い主人よりも、義母という時間が長かった。

ある秋の夕方、義母が社員に、すすきをとつてくるように命じながら、黄色い画用紙に丸いお盆で弧を描き、はさみでくりぬき、脱兎の如く、宴会場に走ってゆく後姿を見て、何事かと思ひ後を追った。間仕切りの宴会場は殺風景で、景色も何もない。別の宴会場は坪庭が見え、差がつきすぎる。大切なお客様なので、今すぐ宴会場を変更してくれとの強いお叱りであった。両手にかかえきれない程のすすきを持ってきた社員の後について、その宴会場に入ると、障子の真中に、まんまるお月様、緋毛氈ひもじゅうの上の三宝膳には、艶々としたあふれるばかり栗の山。そしてお客様のお膳には、お団子が配られつつあった。義母は月見の宴を演出したのであった。すすきを山野にあるように配した後は、お客様を待つばかりの宴席。義母の「私にお任せ下さい」という気遣いと機転、号令一下、義母の意を得て甲斐甲斐しく

たち働く社員達の気持ちに添えて添乗員の方は、「すばらしい。ありがとう。坪庭のある宴会場より、この月がある宴会場が気に入ったよ。」と快く許して下さい、宴席に参上した義母は、「本日は、ことに大切なお客様とお聞きしておりましたので、かみのやまの満ちたる月と共に、お越しを嬉しくお待ちしております。」と、深々とお辞儀をした。控え目ながらもお客様を思う心情が切々と伝わる御礼ご挨拶であった。宴会場の外で待機していた私は、安堵感と感動で、心が満ちてゆき、何ともいぬ喜びがこみあげてきた。お客様からの好意の拍手に送られ宴席から退出した義母にむかつて、

「お母様の黄色い月を見習って、私はうさぎの耳の形に切った白い画用紙の真中を、紅花に染めた両耳をつけて、ぴよんぴよんと飛び跳ねたい気持ちでした。小学校の学芸会で『すずらんの鐘』という劇で、うさぎのお母さん役をしたことを今思い出しました。あの耳を持つてお嫁にすればよかった。」と言った私に、「まさか」と義母は声をたてて笑った。「洋詩恵、あなたはいい人ね。面白い人ね。おもてなしの心は、それでいいのよ。あなたなら大丈夫。女将業つとまるわ。」と私の背中をポンと押してくれたのだった。優しく暖かな義母の前で、私は嫁の立場を忘れ、いつも娘になるのだった。月の宴会場では、炭坑節の踊りの輪が広がり、花笠の代わりに丸いお盆をもつての花笠踊りま

で飛び出し、気を効かせた社員が花笠を持ってゆくと、踊りの輪は更に、大きくなり、一同踊り疲れて、めでたく秋の夜長の宴会は盛りあがり終了した。

女将の仕事の大半は、お客様には見えない気働きであり、社員の陣頭指導をとることの責任の重さである。人間愛に根ざした献身的な働きの不断の努力があらばこそ成り立つ、人間の心の交流がもたらす泣き笑いの日々の営みの全てと、非力ながらも、知り始めた頃、私は三十歳になっていた。

昭和五十七年は、山形県の観光において、画期的な年であった。同年の東北新幹線開通により、山形県の観光地が通過地となり、首都圏からのお客様が隣の宮城県に旅行するのではという大いなる危機感が、官民一体となった『ディステイネーションキャンペーン』紅花の山形路』に結集した。平成四年開催の『べにばな国体』の成功を目指しての観光山形の幕開けの年、地中海沿岸、エジプトが原産地のキク科のアザミに似た鮮黄色の可憐な花の紅花が、山形の花と認知され、県の花に制定された。その年の夏、東京からのお座敷列車でお越しのお客様に歓迎の花束贈呈を頼まれ、手にした紅花の花束。花笠祭の初日の八月六日、私は初めて、本物の紅花を見たのだった。やっと出逢えた紅花の花は、山形県のシンボルの花となり、他山の者の私には、まぶしい程の太陽のような憧憬の花であった。

酒田ご出身の恩師伊藤善市先生は、「知恵出せ。欲出せ。

元氣出せ。インドレスのがんばりを」と折々に励まして下さった。当館にお泊まりの時、「トルコ地方で、紅花は間抜けな驢馬ちばも見向きもしない花というのは、紅花に棘があつて、驢馬が食べられないからいうのだよ。しかし、紅花は美しい、いい花だね。薬用効果もあるし、紅花染めもいいねえ。わが山形の県の花になってよかつた。君も、遠くからやって来たのだから、紅花のように、早く山形の地に根づいて、花を咲かせるといいね。応援するよ。この次は家内を連れ、家族皆で泊まりに来るよ。」と言われ、私の差し出したらくやきに『紅花のふるさとしのぶアルカディア』『薫風自南方』とお書き下された。師の生まれ故郷の近くの日本海に沈む真っ赤な太陽は、魂を育みし父なる蔵王連峰に昇る太陽。海に入るまで濁らざりける川の如く、一節貰く母なる故郷への純な思いを持して、生き、生かされてゆくことの大切さを、身をもってご教示いただいた我が師の恩情にお報いする為にも、明るく前向きに、心尽して宿の場で、日々を重ねてゆこうと決意した。望郷の思いを愛郷の想いに代えての私の内なる旅の始まりは、宿の場で、紅花への追慕の想いを具現化してゆく女将の日々の始まりでもあつた。

俳聖芭蕉が愛した紅花の山形路での四十二日間の旅程で、山形県入りしたのは七月一日。半夏一つ咲きの紅の花を芭蕉は見た。孤高の人生の旅の達人芭蕉が好んで旅した山形

路は、江戸で「紅花大尽」と呼ばれた尾花沢の豪商鈴木清風を始め、温かく芭蕉を迎えた土地の風流を好んだ俳人達との诗情豊かな脈々とした赤き血の通う、心の通い路であった。

紅花が結んだ東西の文化の道の歴史の、語り部の宿となりたく、館内に紅花の風情を演出した。宿は全世界から、人が集まり交流する場と考え、誇りに思うわが山形の風土、風景、風味の三風を旅人に快くやさしくお伝えしたいという熱き思いを紅花に託した。コンベンションホールの紅花総柄模様の絨毯。米沢の新田機業様にお願ひした紅花染めの暖簾。紅花の殖産銀行の故長谷川吉内様にお許しを頂き作製したアート・デコの紅花屏風。お料理の献立に紅花グラタン、紅花そば、紅花御飯、紅花揚げ、紅花おひたし、紅花酒などを用意し、県花紅花をPRした日々。京文化との交流の史実を得て、義母が日本で初めて旅館内に設けた「京風料亭やまびこ」を拡張した。一階の大浴場の湯舟に、かみのやまの湯を母なる最上川に見立てて、北前船を浮かべ、シルクフラワールの紅花をのせ、昔日の紅花交易の歴史を再現してみた。生前、親交の深かった真壁仁先生に創作していただいた多くの詩句の中より、義母と相談して、起承転結よろしく四篇の詩句を選び、紅花風呂の壁面に印刷した。

『ナイルの岸 たどりし紅花のふるさと 遙かなりき』

『紅花は東へ シルクロードは絹の道だった』 『京雛の唇の紅 あれはおらだづの里の紅花の色だべ』 『旅ゆかん 旅ゆかん 紅花の里 人あたたかし』 大いなる出逢いと口マン満たされる心豊かなみちのくの宿を、社員と共に築きあげることを夢みつつ、清明の頃、種を播く紅花への思いを新たにしている。東北公益文科大学のキャンパスのひとつの春の風情に思いを馳せ、紅花がとりもつてくれた友情に感謝。山形に感謝。我が祖国、日本に感謝。

四月五日晴れた朝。

(日本の宿 古黒 女将)

